

浜松まつりにおける御殿屋台文化の創造と継承

愛知大学 地域政策学部地域政策学科まちづくりコース 4年 渡辺夏綺

1. 研究背景と目的・方法

地域の文化遺産である浜松まつりの御殿屋台文化の変遷とその影響を紐解くことで、各参加町の住民にとって屋台がどのような存在であるのか考察を行なった。さらに、後世へと継承していくための手段と環境を見直すことを目的とし、御殿屋台の歴史的価値の確認と屋台の保存環境の現状を把握し、継承の在り方について検討した。

研究を進めるにあたり、文化の誕生からその変遷について文献での調査や事実確認を行なった。各町の屋台蔵を実際に見に行った際に得られた情報やオープンデータをもとに GIS を用いて、参加状況や蔵の分布、災害リスクを可視化した。さらに、御殿屋台引き回しへの参加状況と社会動向を照らし合わせることで、各町の現状を把握し、継承の在り方への検討を進めた。

2. 御殿屋台文化の創造

浜松まつりは神社仏閣に直接的に関係が無く、地域のなかで特異な進化を遂げた祭礼文化である。元々、浜松まつりは凧揚げのみの開催であった。そのため、浜松まつりの御殿屋台は最初から御殿屋台の形をしていたわけではなく、凧揚げ合戦で使用する道具を運ぶための大八車から始まり、底抜け屋台、底付き屋台、御殿屋台、と時代とともに姿を変えていった。御殿屋台文化は、ハレの日を祝うために各町の住民が競い合い、祭りの目玉、そして屋台の引き回しに参加する町の誇りという大きな存在へと発展した。

さらに、御殿屋台文化の創造により、こ

れまで祭りに参加できなかった女性や子供が表立って祭りを楽しむことができるようになり、より多くの市民参加を実現させた。

3. 御殿屋台文化の継承

御殿屋台引き回しにおける継承の課題を社会動向と災害リスクの2つの観点から明らかにした。浜松市も高齢化や人口減少が進んでいるものの、緊急度が高いわけではない。その一方で、屋台蔵の災害リスクを見てみると、半数以上の町の蔵が河川氾濫の被害が想定される範囲に、1町が津波の被害が想定される範囲に分布していることが分かった。

4. 考察とまとめ

御殿屋台における災害リスクが高いことを踏まえ、被災した際に国や自治体から補助金や支援を受けることができる有形民俗文化財への登録・指定を提案した。現在、御殿屋台に文化財指定の兆しが見えないのは、町民が屋台に対して継承の意識はあるものの、文化財の指定に結び付いていないことが大きな要因であるとした。

町民や浜松市民に御殿屋台とその文化の歴史的価値や必要性を周知し、御殿屋台の継承をより意識してもらうには、浜松市が導入している認定文化財制度の活用を起点とした段階的な対策が重要であると考え